# 第十回　怪談

季節外れの怪談をおひとつ。

「遊ぶ金欲しさに高校生　老女を殺害」。こんなニュースを見ると「おそろしいいい」と思いますね。まったくです。では、こんな殺人鬼はどこから生まれてきたのでしょう。

七月の「子育て共室」でメディアとのつきあい方をめぐる井戸端会議が盛り上がりました。テレビを見せるにも、子どもの要求のままに見せてしまうと、いつのまにか子どもは自分の欲求が通るものだと思う。逆に、時間を決めることで、約束を守ることや節度、がまんすることを学ぶ。テレビ視聴という一つのことをめぐって、育つものが違ってくるわけです。わがままが育つか、自己抑制が身につくか。

ここで、流れやすいのは《ポイント①自分の思いのままを通す心が育まれる》という方向です。

ゲームソフトやDVDなどはどんどん欲しくなります。お金がいります。遊ぶのにはお金がいるという刷り込みがおこなわれます。大きくなって「金がないから遊べない」とか言うようになります。いいかえると、《ポイント②遊びたいから金が欲しい》と思うようになります。

この手の遊びは実は、遊んでいるというより遊ばれていると言った方がいいでしょう。誰か（大人）がハマるように頭をひねって仕組んだワナにハマっていくことであるのに、遊んだ気になっているのです。

でも遊びの真骨頂は自発性です。「遊ぶ」と「遊ばれる」の違いがわからない人は幼稚園に入るといいでしょう。「遊びの学校」がめざすのは、自ら遊びを創り出す子どもを育むことです。

また、お金がかかる遊びにせっせと投資するのは、おじいちゃんおばあちゃんであることも多いでしょう。孫の面倒をみるのに手を焼いたり、言うことを聞かせようと思ったりすると、買い物に連れて行っておもちゃを買い与えてしまう。

以前ある喫茶店でおじいさん同士の話が聞こえてきました。「うちの孫は、おみやげ持っていかんと相手にしてくれへん。」もので釣っていたつもりが、おじいちゃんよりモノを期待する子どもを仕立てあげてしまったとは、哀れな感じがします。

ここで養われてしまった感覚は、《ポイント③年寄りはお金を持っている》ということです。お年寄りにかぎらず、他人はモノをもってくるかぎり意味があるという心根がひそかに発生しているとしたら、いやしいどころかおそろしいことです。

さてこれで条件はそろいました。遊びたい―意のままにしたい―金がいる―老人は金持ち、こうして最初に書いた事件の準備完了。

特別に悪い人間がいて悪いことしているならわかりやすい。でも現実はそうではなくて、普通の人が普通にしているだけなのに、それが恐ろしい結末をもたらす種をまいていることになるとは。だからおそろしいのです。

そんなおそろしい時代だから、その時代が持っている制約をみすえて（そのためには歴史・世界という大きなふるいにかけて）、幼児教育をしていきたいと思うのです。それで、遊びの学校なのです。